

令和元年度第1回那珂市総合教育会議 議事録

1 日 時 令和元年12月23日(月)
午前10時00分～午前11時55分

2 場 所 那珂市役所5階502・503会議室

3 出席者

(構成員) 市長 先崎 光 教育委員 中澤 明
教育長職務代理者 住谷 光一 教育委員 小笠原 聖華
教育委員 榊原 一和 教育長 大縄 久雄

(事務局) 【総務部 総務課】

総務部総務部長 加藤 裕一
総務部総務課長 渡邊 莊一
課長補佐(総括) 飛田 建
課長補佐(総務グループ長) 小泉 友哉
総務グループ主幹 齋藤 哲生

【教育委員会教育部 学校教育課 指導室】

教育部長 高橋 秀貴
教育部学校教育課長 小橋 聡子
課長補佐(総括) 会沢 実
副参事兼指導室長 沼田 義博
課長補佐(総務・再編グループ長) 生田目 綾子
課長補佐(学務・施設グループ長) 寺門 珠美

【教育委員会教育部 生涯学習課】

生涯学習課長 高安 正紀
課長補佐(総括) 萩野谷 智通

4 会議次第

- 1 開 会
- 2 市長あいさつ
- 3 協議事項
(1) 小中学校の適正規模・適正配置について
- 4 その他
- 5 閉 会

5 内 容

渡邊総務課長： 定刻となりましたので、ただいまから令和元年度第1回那珂市総合教育会議を開催いたします。

この総合教育会議は平成27年度より設置されたものですが、その趣旨は、市長と教育委員会が十分な意思疎通を図り、那珂市の教育に係る課題、目指す姿などを共有しながら、同じ方向性のもとで、連携して効果的な教育行政を推進するというものでございます。

本日の会議進行でございますが、協議事項として1件でございます。次第3番(1)としまして、近年の少子化等の問題より教育現場において課題となっている「小中学校の適正規模・適正配置について」になります。

こちらは、那珂市教育大綱の施策1「豊かな心を育む学校教育の充実を図る」に方針として位置づけされており、並びに、先崎市長就任後、「活力あふれる那珂市」を実現するために、特に取り組むべき方向性を示すものとして「可能性への挑戦(那珂ビジョン)」を策定しましたが、その中にも位置づけられているものです。

初めに、先崎市長より那珂ビジョン(教育委員会に係る部分)について説明いただき、その後、本市における小中学校の現状と課題について事務局より説明させていただきます。

説明等が終わりましたら、市長と教育長及び教育委員の意見交換をフリートーキング形式で行います。

市長の考えや教育委員の意見などを自由にお話いただきたいと考えております。

なお、この問題については、市及び教育委員会でもこれから段階を踏んで議論を進めていく内容と思いますので、現時点で教育委員会としての統一した考えもまとまっていないことは思います。したがって、本会議においては、あくまで現時点での意見交換の場にさせていただければと考えております。よろしくお願いいたします。

それでは、協議事項に入る前に、先崎市長より、ごあいさつをお願いいたします。

先崎市長： 本日は令和元年度第1回的那珂市総合教育会議に、ご多忙の中ご出席いただきまして誠にありがとうございます。また、平素から子どもたちの健全育成、本市の教育行政の充実推進にご尽力いただいておりますこと、心から感謝申し上げます。会議の意義等につきましては先ほど総務課長からありましたけれども、私もかつて議員時代に総合教育会議のスタートに当たって、色々と接する機会がありました。特に、教育現場の課題はたくさんあるわけですが、いじめ問題とか県内でも大変大きな問題がありましたけれども、教育行政で一生懸命現場を対応していて、それに対して首長、いわゆる行政部門はどうだったのか。住民から見ると、教育委員会も行政

も当然一体として見えるのが普通なのですね。ですからそれは教育委員会のことだよ。行政はちょっと距離感があるのだからということでは、やはり住民は納得しないのですね。そういうことを考えると、やはり教育委員の皆様、あるいは教育行政と市長部局、そういったものがきちんと連携をしていくことが住民に対して、きちんとした説明責任を果たしていくということに繋がると思うのですよ。そういった意味でこの総合教育会議は設置をされました。県でもそういう話をいただいて、そのとおりだと私も納得をいたしております。年に1回ですから、なかなか時間もたっぷりあるということではございません。場合によっては、複数回必要ということもあります。そういったことがないことがやっぱり一般的には望ましいのかなど私は思っております。年度の後半も押し迫ってからの会議ということで、皆様方には本当にご苦勞かけますけども、よろしく願いをしたいと思っております。現場のことについては、教育委員の先生方に色々なところでお世話になっております。そういうことも踏まえまして、今日の会議が進めばいいなというふうに思っております。

今日のテーマは、私が現在の教育環境の課題の一つと考えている「小中学校の適正規模・適正配置について」ということであります。現場のことは、先生方がそれぞれ色々なところで色々な観点から熟知をされていると思います。本日の意見の交換の中で、この課題について、議論が少し深まればいいなというふうに思っております。大事な視点は、戸多小学校、そして本米崎小学校が閉校、そして統合されました。そのことによって、子どもたちの教育環境、あるいは地域の環境、そういったものはどう変わったのか。どう進んだのか。あるいはそうではなかったのか。そういったことも検証しながら、この会が有意義な場になれば、大変ありがたいなというふうに思っております。最後になりますけれども、年末になりました。先ほどもインフルエンザの話申し上げましたけれども、教育委員の先生方には健康に留意されまして、本市の教育行政のますますの発展のために、ご尽力いただきますことを心からお願い申し上げまして、会議にあたりましてのあいさつとさせていただきます。よろしく申し上げます。

渡邊総務課長： それでは、この後の次第3協議事項につきましては、那珂市総合教育会議設置要綱第4条の規定に基づき、市長が議長となりまして、会議を進めていくこととなります。それでは、市長よろしくお願いたします。

先崎市長： それでは要綱に基づき議長を務めさせていただきます。どうぞ円滑な議事進行にご協力をお願い申し上げます。なお、本会議につきましては、規定によりまして、原則公開とされておりますので、

公開で行いたいと存じます。どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは早速、お手元の次第に基づきまして協議に入ります。次第3番の協議事項の(1)「小中学校の適正規模・適正配置について」を議題とします。冒頭、総務課長の説明でもありましたが、この議題につきましては、今年度策定させていただきました「可能性への挑戦(那珂ビジョン)」に記載されている内容となっております。皆様にも那珂ビジョンを配布させていただきましたが、その中でも「学校立地の適正化」を含めた教育委員会に係る部分について、私の考えや思いを説明させていただきます。那珂ビジョンがお手元にあると思うのですが、9ページの(3)番として、公共施設の適正化という項目があります。この那珂ビジョンを振り返りますと、今年の5月に、私が市長に就任をしてから、どういった考えで政策を進めていくかという基本的な方針のもとにプロジェクトチームをつくって策定をしたビジョンであります。そういった中で、市のそれぞれの分野について進むべき方向性を定めたわけでありませうけれども、その中で、魅力ある未来への投資という部分の中で、この公共施設の適正化についても述べさせていただきました。

(3)番の公共施設の適正化を見ていただきますと、前段は那珂市の配置、公共施設、学校施設数ですね。そういったものの現状あるいは子どもたちの少人数化、減少化などが書いてありますけれども、中段よりそのような中で、人的、財政的な余力を満たすためには、学校立地の適正化という言葉が出てくるようになります。教育は全て人的財政的なもので図れるものではないですけれども、やはり全体的な公共施設のマネジメントをそういった観点からも考えなくてははいけない。無尽蔵に那珂市の財源があるわけではありませぬので、そういったものも含めて、立地の適正化について考えなくてははいけないということで、ここの部分で表現をさせていただいております。また同ビジョンの最終ページ、14ページにありますけれども、ここでもこの推進計画の中で謳わせていただきました。1番最下段の枠組み、(3)公共施設の適正化という中で3段目の枠でありますけれども、学校立地の適正化について検討するということで、令和1年から2年で調査、3年から4年で調査、そして、5年度に方針を決定とそういう推進計画の中に上げさせていただいております。

あわせて皆様方にもご審議いただいて作りましてこの教育大綱の2ページの下段の方になりますけれども黒丸の4番目に、小規模校の活性化を図るとともに、将来の学校を取り巻く状況を踏まえ、小中学校の適正規模化について検討しますと、そういう文言が入っております。既に皆様、感じてらっしゃるでしょうけれども、那珂市は比較的まだ少子化の波が全体的には緩くなっています。しかし市内を見渡せば、激しいところとそうではないところがありますので、

そういった状況も鑑みながら、将来的な適正規模・適正配置を考えていかななくてはならないということになっていくと思います。私はこの那珂ビジョンをつくっていく中でもそういうことを色々職員の皆様ともやりとりをしましたけれども、基本的にはやっぱり学校は地域のコミュニティっていう側面も持っていますので、子どもたちの教育の現場は当然、非常に重要なわけでありますけれども、それとあわせて、地域の学校を中心にしたコミュニティをどうつくっていくかっていうことも重要な視点と考えています。個人的な思いになるかもしれませんが、戸多地区、そして本米崎地区がそのことだけではないのしょうけども、地域の中で非常に元気がなくなってきた。簡単に言いますと子どもの声が地域から無くなってしまっている。学校があるからそういうことではないと思うのですけれども、やっぱり住民の気持ちの中にもそういった疲弊感とか落胆が強く感じられるという話を聞いています。子どもたちのために、どういう環境がいいのかっていうのが1番大事な視点なのですけども、もう一つの大事な視点としてやっぱり地域コミュニティ、地域の中で子どもたちをどう育てていくかという大事な観点も今後の適正規模・適正配置については重要な視点とと思っていますので、そういったことなんかも含めて、皆様と有意義な話し合いができればいいなというふうに思っていますので、よろしく願いいたします。

以上那珂ビジョンについてあるいは私の考えや思いを述べさせていただきましたが、ビジョンに掲げた適正規模・適正配置の方針決定にあたっては、当然教育委員会と認識を共有しながら、共に取り組んでいかなければならない重要な課題だと認識をしております。本日は、適正規模あるいは適正配置ということについて、教育長さんはじめ、教育委員の先生方にどのような考えを今お持ちなのか。そして様々なご意見をお聞かせいただきたいと考えております。その議論の前段として、小中学校における現状や課題について、事務局からご説明をお願いします。

小橋学校教育課長：（本市における小中学校の現況と課題について説明）

先崎市長： 私からは那珂ビジョンについて説明をさせていただき、また事務局からは、小中学校の現状と課題について説明がございました。これらを踏まえて、この後は皆様とのフリートーキングで進めていきたいと思っております。ただいまの説明の中には、教育委員の皆様には、初めて聞くような内容もあったかもしれません。私も那珂ビジョンに対してでも、事務局からの現状についてでも結構でございますので、確認したい点や、わかりづらい点などがありましたらご質問などお受けしたいと思います。十分ご理解をいただいた上で意見交換に入っていただければと思いますけども、いかがでしょうか。何か私の話あるいは事務局の説明について確認したいことがありました

らば、遠慮なくお願いをしたいと思います。私なんかも認識があまりできてないのですが、子どもたちの数の減少なんかもね、菅谷地区あたりは減っていないのかなと思ったりやっぱり微妙に減っているのですね。そういうことも認識として踏まえなくちゃいけないし、それでも全体的には減少率は、周辺に比べて緩やかですね。出生数は減っているのですがけれども転入なんかが結構あるので、一定の割合を維持しているっていう解釈でいいのかな。

小橋学校教育課長： はい、出生数なのですが那珂市の場合は400人前後で推移しております。直近で平成29年度は394人ということで、男女で半々です。合計特殊出生率というのがありますが、直近で平成27年は、那珂市は1.37。10年前とか5年前より、全国で見れば回復傾向にあるような中、那珂市は国や県に比べて若干下回っているという現状がございます。先ほど転入転出ということで社会的な増加がどうなっているかということなのですが、那珂市の場合は平成24年度以降は年平均で84人の社会的増加となっております。那珂市の場合は減少しているどころか増加傾向になっているということです。先ほど将来推計ということで策定中の子ども子育て支援事業計画というところの数値を参考までに傾向を申し上げたのですが、今後の小学生の累計というのも数字として出ていまして、参考までに申し上げますと、令和2年度は2,650人。計画上の推計としているのですが、その後令和6年度は2年度に比べて91人減少の2,559人という推計をしているということもございます。以上です。

先崎市長： はい。ありがとうございます。全国的な傾向に比べて出生率は、合計特殊出生率は落ちているっていうのは市の政策としてやっぱりもう少し頑張らなくちゃいけないのかなっていうデータだったと思いますね。転入されるお子さんが結構それなりにいるので、やっぱり一定規模を維持していると、全体的にそういう傾向があるということだったと思います。他に、委員さんからはどうですか。

小笠原委員： すみません、今ちょっと人口の出生の問題が出てきましたので、そのことに関してなのですが、今やっているのはもちろん教育委員会と行政のお話し合いなのですが、やはり、子どもが生まれてくるとそれから育てていくことを考えたときには、当然先ほどの福祉との関係も非常に密接になってくると思います。今後やはり、学校の規模適正化も含めて、学校の問題っていうのは様々な分野の意見も取り入れた中で話を伺いたいなど。例えば私たち教育委員ですが、実際に出生の問題とか、それから、幼児教育の問題に関しては、やっぱりちょっと分野が違ってしまふ。そこで、小学校に上がってきからの現状はよく分かるけどもそれ以前の問題

から当然深く関わってくることを思いますので、今後、様々な分野の観点から話し合いがさらに持たれることを期待します。

先崎市長： はい、ありがとうございます。大事な視点ですよ。学校だけ見ているとなかなかこう小さなところに入りがちになっちゃいますけど、社会全体の動向も、適当な時期にまた提供していきたいと思います。

住谷委員： 今小笠原委員の話に関連してなのですけども、どこの地方自治体でも人口減少っていうのは、大変な問題ですが、那珂市でいえば、例えば子どもを増やすということでない、これからどんどんじり貧になると。そうすると社会政策的には婚活、独身の方々が随分おられますので、そういうかたが結婚できるような政策ということも考えられます。私ちょっと常陸太田市の山間部の学校にかかわっておりますが、これ激減なんていう問題ではなくて、小中統合をこの前にしました。旧水府村ですかね。これは年寄りの方々が結構学校に来られて色々なことをやっていらっしゃるのですが、病院がない、買い物できない、歳とったら車乗れない等といった声があります。そうした場合に、那珂市は平坦地で住みやすいと聞いているので、家を探してくれないかっていうような話を実際に聞きます。実際なかなかないのですけれども。それから市のほうでも空き家が非常に多いので、そこに何とか他から移り住んでもらおうと。私は笠間に関係していますので、焼き物屋さんの女のかたを1人、大きな60坪の建てたばかりの日本家屋の空き家に1人入れてあげました。月1万円で喜んで借りていました。そういうことも、市として産業の誘致ですか、そういうこともトータルで、やはり市の行政というものを考えていかななくてはいけないと同時にそれは財政問題でありますので、本日この小規模校の問題と財政問題は関係がありますので、それもトータルに議論していかなきゃいけないのかなっていう印象を持っております。以上でございます。

先崎市長： はい、ありがとうございます。幅広い視点で考えていく必要があるということですね。ちょっと質問も含めてというふうにお話しましたが、ご意見等もいただきながら、進めていきたいと思っておりますので、それぞれの委員さんの思い、あるいは考え方をご自由に発言をしていただければと思います。一つ、きっかけになるかどうかわかりませんが、私は県議会のときに、前にもお話ししましたかね。当時十王の山部小学校というところに見に行きまして、児童数は32人でした。それでも統廃合しないで頑張っている、地域的には山の中にありますので地域的な条件もあるのでしょうけども、やっぱり地域に学校がなくなっちゃうと大変だということで、地域の方々は県にお願いをして県営住宅を誘致して、若い人たちが入ってもらう、その子どもたちには地元の小学校に通ってもらうって

いう、書面では至らなかったのですが口頭でそういうふうにお約束をしてもらって、安い家賃で入居してもらって何とか少子化を防いで頑張っているというお話を。それが一定期間過ぎると子どもが大きくなっちゃうので、また次の土地を住民が提供して、次の団地を誘致しようかなんて話をしているっていう話をしていましたけれども、そういうところを見てきました。当然、児童数が少ないですから、先生の数も少ないので、先生は日立市が単費で講師を3人、4人入れていましたね。それは市の行政も32人の学校を一生懸命応援していると。そこがやっぱり無くなってしまうと、地域が大変な状況になるという中で、小規模特認校の話もありましたけれども、自閉症とか大きな学校に行っても細やかな教育や配慮が受けづらい子どもさんたちに山部小学校に通ってもらって、児童数の確保につながっているという話があって、小規模校というのはやっぱり地域の事情とか色々なもの考えれば、やっぱりもっと考えていく必要があるのだなっていうふうに思いました。そこの卒業生は十王中学校に行くのですが、みんな生徒会の役員とか運動部のリーダーになっていくということで、学校のテストの成績も県内でトップレベルだって言っていましたね。やっぱり少人数ゆえに、細かい対応ができる。一人一人にきめ細かな対応ができるっていうことで、そういう成果が出ているっていうふうに校長先生はじめおっしゃってましたけれども、地域の方々も一生懸命で、学校になるべくかかわって学校に参加しようという子どもたちに地域の経験をしてもらおうということで、茨城県最北のみかん園なんかも近くにあってその子どもたちに一生懸命みかんの収穫作業を体験してもらい、地域と一緒にあって、運動会は当然ですけども、そういう現場を見させてもらって、やっぱり小規模校は小規模校なりに、頑張ってやっていくっていう一つの見方もあるのだなっていうのをまざまざと感じたのですね。ですから、それが戸多、本米崎に活かされたかどうかわかりませんが、そういう視点も、今後においては大事なのだなということを感じたので、県議会でも発表させてもらいましたし、確か何かの機会でも市でもちょっと少しだけ申し上げたようなことがあったと思います。またそういうことも、ご参考にさせていただければというふうに思っております。

榊原委員： 私在住がどうしても額田なもんですから、もちろん私、額田小学校出ましたし、那珂二中を卒業させていただいたものとして、1番やっぱりここに目が行ってしまうのですけれども、全体論から言うと額田は非常に減少率の高い、市でいうと木崎の次ですかね、28.8%。確かに5年前に比べて非常に活気が薄れてきているっていうのが現状なのです。額田地区の場合は。横堀に関しては、一部杉地区に市街化をもっておりまして、多少なりとも児童数、もちろん

本米崎がくっ付いたというところの部分もあるのでしょうか、そういうところでちょっと学年ごとには今年の多分1年生なんか結構の方々も入ってきたって話は聞いたのですけれども、そういうところも含めて、やはり地域で特色を生かしながらやっていかないと今後学校、もちろんコミュニティの中心という考え方、額田なんか特にそういうところ強いですから。そういう地域住民の方にもご認識いただいた上で、学校というものはどういうものなのか、あるべき姿はどういうものなかっていうのを考えていかないとこれから先やっぱり5年後10年後っていうのは非常にネガティブな発言が多くなってきちゃうのかなというふうに僕は思っております。

先崎市長： はい、ありがとうございます。地域と一緒に考えていかなくちやいけないのではないかっていうご意見でしたね。中澤先生いかがでしょうか。

中澤委員： 今お聞きして子どもの数っていうふうなのが徐々に減っているというふうなお話でしたが、大体现状とそんなに変わらないじゃないのかな。その現状を踏まえて、学校の適正規模というふうなところを考えていかなくちやならないというふうな認識ですけど、要するには課長さんのほうから、ソフト面とハード面の話がありましたけれど、私はもうハード面の考えはほとんどなかったです。ソフト面というか人的なもの、そういう風な面から適正規模を考えていかなくちやならないじゃないかなと。それを思ったのは、私38年間の教員生活の中で一つの汚点があります。それは、私が1年間英語を持ったのです。最初に赴任した中学校で私は理科の教員として採用されたのですが、どうしても要するに、授業の編成上2クラス持ってくれと。1番最初に私が新採で入った学校なのですけれど、校長の方からそう言われたのです。そして、最初の職員会議の後、校長さん、何で私が英語持たなくちやならないのですかと。全然自信がありませんって言ったのですけれど。でも、そういうふうな中でどうしても最初の中学校1年生だからと。そのころの英語というのは、要するにスピーキングがほとんどなく、読んで意味が分かればいいのだから、そういうふうな指導をやってくれと。でも、やはり自信のない教科を教えるっていうのは、そのころ中間、期末ありましたけれど、他の先生と自分の教え方はどうなのだろうか。毎回びくびくしながら中間、期末の全体のクラスを見ていたっていうふうなのがあります。ですから、この中で私が言いたいのは、中学校の教科といった場合において、今現状では7クラス以上は全部全教科配置というふうなところですけど、各中学校を見させていただいた場合においては、主要教科のそういうふうなことはありませんけれど、どうしても、例えば、技術、家庭、美術はそういうふうなところで教科を上手く調整をやっているみたいですけど。是非とも私

自身はそういうふうな中で、免許外の教科を教えるというふうな現状が出てきた場合においては、是非ともそこは早急に考えなくちゃならないのかなっていうふうなのが自分自身の経験なのです。ただ、先ほど市長さんがおっしゃいましたように、那珂市そんなに財政的に余裕ない云々というふうなところもあって、課長の方からの説明で東小とか四中が大規模改修云々っていうふうなところ、そうするとそういうふうのを考えていった場合に、木崎小の人数のところさらにそういうふうな大規模改修的なものを加えていったいいのかなと。そこも考えなくちゃいけないのかなと。ただ、基本は、私自身そういうふうな適正規模というのは、子どもたちが公平な教育を受けられるっていうのが最低限の条件かなと思うのです。それが外れたら適正規模、要するに統廃合やらなくちゃいけないのかなっていうふうなところを思っております。

先崎市長： その他いかがでしょうか。はい、どうぞ。

榑原委員： あとは部活動の問題なんかも中学校は出てくると思うのですよ。今回、今年1年間、うちの3番目が二中のほうに入学したものですから、部活動の1年間の流れを何となく見させていただきました。実際問題、資料の2ページ、二中の野球部は令和2年度末で廃部、一応私の中で予定っていうふうに学校で聞いておるのですけども。実は1年生1人だけの部員のうちの息子なのですよ。今年新人戦以降、総体だから3年生のときも実際は那珂二中と東海南中学校で連合チームを組んで大会に出た。新人戦ですね。この新チームになってからは、那珂市内の瓜連中学校と那珂二中プラス東海南中学校の3校連合で出させていただきました。サッカー部もちなみに言うと那珂二中と瓜連中学校が合同チームで新人戦の方に参加しております。生き残り方として、現場の判断ではもちろん先生の数が限られていますので顧問の先生方、配置ができない、2名の先生だと思ったのですけども。そういうところで現場の判断でやっていくと、どっかの部活をやっぱり端折るしかないっていう傾向にはなってきているのだけれども、実際のところ、私ちょっと野球最良が実に強い人なので、こういう言い方も変なのだけれども、野球部がなくなって実に地域でも寂しい話だというふうな意見を正直伺っています。ただ現状野球部に入部する人間がいなければ、生徒がいなければ、これはやむを得ないかなというふうに実は思っています。ただ今、やっぱり全中学校見ている、実に部活動の人員の生徒数、それが少なくなっているのはどの部活でも切実な問題になってきていると思います。以上です。

先崎市長： はい、合同チームの現状も今お話いただきました。小学校と中学校でやっぱり考える視点が違うと思います。私も、実は小学校と中学校やっぱり違うだろうなど。小学校は、やっぱり地域のコミュニ

ティの中で子どもたちが育っていくということもあるので、理想ならば、地域にきちんと残ったほうがいいだろうなど。中学校はやっぱり榊原委員の仰っていたように部活動の問題もあるし、あと受験ってということも控えていますから、色々な意味で、やっぱり次の段階に向かっていく、色々な条件とか環境考えなくちゃいけないというふうになると、中学校はやっぱり一定の大規模でないとなかなかその目的を果たせないのかなっていう気はしているのです。私は素人なのであまり深くそこをどういうふうなことをというのは、なかなか考えが及ばないのですけども、そんな感じで私はちょっと思ったりしているのですね。皆様の中でももしそういったこと以外で結構ですけども、適正規模・適正配置か何かでまたお考えがあればいただきたいと思います。

住谷委員： 小中学校では、当然発達段階が違いますので、小学校の子どもたちを育てる環境条件と中学校とでまた違うかなと思います。水戸市の上大野小学校の例でちょっと話しますと、これも本当小規模校で、ここで言えば、廃校になった本米崎か戸多のような学校なのですが、これは地域でお爺ちゃんお婆ちゃんまで学校行事に参加するのですね。とにかく前から出ていますように学校が無くなったら大変だと小学校が無くなったら地域は活性化しないというのが住民の方々の共通の思いで学校に積極的に参加すると。これは学校からの要請もあったのですが、地元の市議員さんが田んぼからいい粘土がとれるのですね。粘土がとれると分かったので、学校でその粘土で茶碗をつくって、そして、芋煮会みたいなのをやっているのですね。そこに地元の方々が参加して子どもたちがいなくとも関係なく来るのですね。料理をつくってくれたり。そして、学校をバックアップしようと。学校の方でも努力しまして、去年は、理科教育の全国大会ですかね、これをやりました。というふうにして見るからに地域が活性化しているという印象を受けます。学校が無くなったとすると、これは地元の方にとってはダメージですよ。特に、年寄りの方々は生きがいを出すとというふうな感じの気持ちがさせられるものですから、バックアップする方でも一生懸命やろうかなというふうになるのですね。そういう小規模校の生き残る道というものがあるとすれば、地域との連携、年寄りも含めて親も含めて、また他のボランティア団体も含めた連携というのはどうしても必要になってくるかなというふうに思いますね。また今年も、地区外から転入生があったのです。2人。それはそういう行事を聞いて親御さんが町の中の大きな学校に入れるよりもリスクも少ないだろうというようなことで来たようなのですね。そういう例もあるので、学校統廃合というのは、小学校の場合はかなり慎重にやらないといけない。中学校の場合は、生徒さんは皆四中か三中行くので特にこれは問題ないので

すね。かえってたくさん子ども、友達がいた方がいいと。部活もできるというようなことで、ある程度の小規模校のモデルケースみたいなものが出来上がっているかなというふうに印象を持っていますね。以上でございます。

先崎市長： はい、ありがとうございます。他どうでしょうか。

住谷委員さんから上大野小学校の例がありましたけども、委員会で用意していただいた資料にも水戸ですかね。幾つかありましたよね。そういったところをちょっともし簡単にでもこういうことが特徴的だっているのが説明できますかね。

小橋学校教育課長： はい、水戸市の事例を資料には4校ほど載せました。こちらの括弧書きにあるものを特色として出している。これによってこの教育方針に同意した保護者は、こちらの学校に通うということによってやるということです。パンフレットにも載せているのですが、上大野小学校は地域の粘土を使った作陶教室とちゃんとパンフレットにも出ています。

ちょっとついでなので小規模特認校制度をちょっと説明させていただきたいと思います。実はこの制度は正式にこの名称があるわけではありません。通学区域制度というものがあるのですが、これを弾力的に運用。つまりは学区の自由度を高くして、学校を選択できるようにする学校選択制というのが根拠になっております。根拠法令としては学校教育法施行令なのですが、従来通学区域というのは教育委員会が定めるものなのですが、その一方で保護者は指定された学校の変更を申し入れことができるということも規定されていますのでこれを使ったものです。具体的な手続としては指定校変更というところなのです。先ほど私が申し上げたように、保護者がそれぞれの特色を持った教育方針に同意することを理由として、その変更を求めるということになっています。今回は水戸市の事例を4つ載せました。この中で国田義務教育学校。こちらは小中一貫教育の制度とあわせて実施しているという事例です。この小中一貫教育とあわせてやっているという事例が県内は結構ありまして、この他にやっているのが日立市、笠間市、牛久市で事例があるのですが、いずれも小中一貫とあわせてやっているということがございます。

榊原委員： はい、すみません。ちょっと質問なのですが、例えば上大野小学校で理科環境教育やICT教育とあるのですが、これは学校主導でやっているものなのですか。

小橋学校教育課長： はい、そのとおりです。この制度は特に国とか県の制度ではなくて先ほど申し上げた通学区域の自由度を高くするというので、その自治体が、ある学校をこの特色でやっていくという特認校に指定するというので、特に国や県に認定を受けるというものではないで

す。

榊原委員：　ということは、水戸市が上大野小学校に理科環境教育の方の認定をするという形ですかね。

小橋学校教育課長：　はい、そのとおりです。指定をするという形です。

先崎市長：　認定をするということは、それに伴って、多少なりの財政的な支援なんかも、ついてくるときとなるのでしょうか。やっぱりあの地域としては、さっきおっしゃいましたけど、地域の中に小学校がなくなっちゃうというのは大きな問題だっということの中で、行政としてどう対応するかっていうその支援策の一つになるのでしょうか。ただ、あくまでもやっぱり地域の方々がそういう意識にならないと無理ですよ。最終的なものはそこが大きいと思いますので、地域のそういう熱がどんどん上がってくるというのが一つの条件になってくるのでしょうかね。

小笠原委員：　地域の参加について、いま瓜連の白鳥学園でやっているコミュニティスクールについての現状なのですが、いまでも活発に活動している様々なまちづくり委員会を巻き込んで様々な人が参加してくださっているのです。しかし、やはりちょうどもう3年、4年と経つてくると、例えば学習支援活動であれば、今までたくさんの先生が参加してきてくださったのが徐々に少なくなっていくとか、やっぱり継続するにしたがって、大なり小なり様々な問題も出てくる中で、どうやって継続していこうかということについて話し合いをして常に見直しをかけてやっていっている状態です。

例えばその学校の制度、那珂市の今後のものに関しても、必ずこうだではなくて、当然そのときの社会情勢であったり、または市の状況であったり、やっぱり常にきちんと見直しをかけて話し合いをかけて、行政には何年間という縛りがあるのかもしれないですけども、そこは常に子どもたちの最善に対して我々が心を砕くっていう視点でやっていっていかないといけないのかなと思います。もしかしたら人はそれを流動的とか不安定というのかもしれないかもしれませんが、人口の動態に関しても、那珂市はそれほど変わらないので、今まで変わらないできていて、今後もしかしたら変わらないかもしれないという想像もあります。一方では、今は親になる世代がある程度人数がいて、その中で結婚しないとか子どもは生まないっていう、そういう選択の多様性が出てきている中で、今後は親そのものの絶対数が減ってくる中で、その中でさえ、さらに多様性を重視することで、さらに減っていく、その減少に加速がかかるっていう見方もあるわけですね。やはりそこも考慮に入れて小学校や中学校はもちろんですけどもその子どもを育てるっていう中で、私はどちらかというと教育はソフト面の方が大事かなっていう思いがあって、質の高い教育を那珂市に来れば受けられるのだと。それは小学校、中学

校に限らず、本当に幼児のときから何の心配も要らずに、子どもを産んで育てていくことができるのだっていうトータルの政策っていうものをみんなで常に考えていかなきゃいけないのではないかなと思います。

榑原委員： 小笠原さんに追随して僕も小笠原さんのご意見にすごく賛成で、持論というわけじゃないけど持っているものがあって、実際やっぱり質の高い教育が那珂市で受けられるってなったときに、我々親の年代が自分の子どもたちにどういうふうなものを求めているかと。もちろんスポーツでトップを取って欲しいとか色々あるのでしょうかけれども、やっぱり最終的に学力向上というのが1番望むものだと正直思います。であれば、今の時点では風が吹けば桶屋が儲かる話になっちゃうかもしれないけれども、やっぱり教育水準が那珂市は他の市町村より高いというところであれば、多分人口増に繋がると思っています。そこまで考えちゃいますね、教育っていうのは。実に重要なんじゃないかなと思っています。色々な環境ももちろん質も含めての話ですけどもね。そういうところだと僕は思っています。

住谷委員： 日本が近代国家として、世界に伍していったのは明治維新ですよ。そうすると明治維新以後の教育というのは、例えば私どもの横堀地区でいえば、地元の人たちが食べる物も惜しんで子どもたちの教育のために、校舎を建てて先生を雇って教育にあたったということ。を祖父や父からもから聞いてきたのですけれども、そういうスタンスでいうならば、教育は国家百年の大計でありますね。またその教育とは一体なんだという点なのだという事になると、これは文化の継承がないといくら点数をとっても、いい大学入ってもものにならない。やっぱり郷土意識とか、あるいは県民認識とか国家意識とか、これがないことには教育の質というものは維持できないという視点を持たないと教育は駄目だと思いますね。ですから、特に日本の戦後教育は、占領政策もあって、これ骨抜きになっているわけですよ。ですから、肝心のことが教えられていない。私、前に中国行ったときに中国の青年は、一党独裁のもとで完璧なそういう意味での教育なのですよ。昔、3,000人交流とあって、中曽根さんのときの交流で私も出たのですけれども、最初に歓迎レセプションが上海体育館でありました。そのときに、まずやるのは国歌斉唱なのですよ。日本国歌が流れるわけですよ。常識として国際人はそのときは全員立たなきゃいけないのですけど、そのとき私も3,000人の中で立ったのは何百人か。そのときの中国の多くの若い人たちの顔といったらなかったですね。軽蔑の眼差しでございました。これは非常に今でも思い出しますね。次に中国国歌が流れたときに、3,000人がバって一緒に立つのですよ。一斉にですよ。

ある意味で、軍国主義的な教育。この差を見て、日本はそのうちやられるなというふうに私は正直思いました。それがじわじわと来ているというのが現状じゃないでしょうかね。ですから教育の持つ本当の恐さ、それから良さというものはそういうところに出てきますので、那珂市でいうならば郷土教育。例えば、常福寺さんを中心とする歴史とか、静神社を中心とする歴史とか、佐竹さんを中心とする歴史とかいくらでもあるわけなのです。その辺を子どもたちがきちんと受け継いで次に伝えるという作業がないといくら教育やっても、結果として、何も残らないと。色々ないじめ問題なんかも、恐らくそういうところにかかわってくるのだらうなということは、私は常々考えております。以上です。

中澤委員： 住谷先生の話聞きまして、郷土教育っていうか、いやその前に教育っていうのは文化の継承がなければと。そこまで本当に考えたことはあまりなくて。例えば学力的なものっていうかそういうふうなスパッとこう見ちゃうところがあったのですけれど。住谷先生の考え方をした場合において、那珂市では郷土教育として、それぞれのものをひとつ、それを根底に教育かなっていうふうなところも思ったのですけれど。でも、皆様の意見を聞いていても私は、那珂市で例えばこんな心配いらぬ、素晴らしい教育が受けられるのだというふうな情報発信ができれば、少しはやはり子どもっていうか集まってくるのかなとも思いますし、こう考えてみてください。あそここのところに入れば、何とかある程度上へ進めると思えば、そこに人数が集まるのかなと。本当に端的な発想で申しわけないのですけれどそういうふうな感じも先生方の意見を聞いてそう思っております。

先崎市長： はい、本当に素晴らしい意見が出ていますね。やっぱり学力が伸びる。つまり、いい上級学校に行ける。あそこに行けば、そういう道が開けるよっていうのも大きな視点でしょうね。でも人として、80年、90年生きる中で、それも大事なことですけども、自分たちのふるさとの思いとか、それは家族に対する思いなんかに繋がりつたりする。そうするとそういう情操教育っていう場面で、やっぱり子どもたちをどう育てようか。学校との非常に、多様な空間ですよ。それは人間が多様だからですよ。勉強だけして食べられるわけじゃない。働かなくちゃいけない。働くときには役に立つものは何だ。例えば極端な話、英語できなくても、何とか食べるぞと。そういう人もいるかもしれない。だから個々に合った能力。この子にはこういう能力なのだろうと。この子はこういうふうにして大人になっていけばこの子なりの人生歩けるだろうという細かい対応が出来得る空間が学校だったりするのかなと。あくまでもやっぱり、一部のかたを除いては、学校から社会に出てくわ

けですからね。そうすると、社会に出ていっても、ひとり立ちできるような基礎的な能力をやっぱり学ばせる、学んでもらう場所が学校だったりするとなると、学力も必要でしょうし、人間としてのマナーとか、あるいは郷土に対する愛着心とか色々なものが必要になってくる。おそらく那珂市の教育はそういうことを基本にしてやってこられているから間違いないと思いますね。ただ、今さっき小笠原委員が言った時代がどんどん動いていると、5年前につくった基本計画でも、もしかしたら変わってくる可能性もある。地域はもっと動きが激しい場合もあると。だから常に見直しをして点検をしていってというのは確かに必要なのだと思うのですね。学校にたくさんのかたがかかわってくれるというのは、ありがたい。一時、池田の事件があってから学校を外部と遮断しようというか、不審者が入ってこないようにというか閉ざした出した学校みたいなことも、一応やりましたけども、それではやっぱりいけないと、色々な人が学校にかかわってもらって、やっぱりそういう社会とのかかわり、大人とのかかわりの中でやっぱり子どもは学んでいかなくちゃいけないのだってということに一回立ち戻って行って、今のような風潮があるのだと思うのですけども。本当に考えさせられる意見でしたね。皆様の意見を聞いて。教育長に聞くとまとめた話なっちゃって終わっちゃうのでなかなか振りづらいのですけども、今の段階でちょっと感じるようなことがあればどうですかね。

大縄教育長： 何点かあるのですけど水戸の特認校では単純に生徒数が減ってきて学区を撤廃するところから始まったのです。私も水戸にいたので。つまり、国田が小中一貫になるときに、一貫校としてつくると始まったのだけれどもやっぱり国田地区の児童生徒数は減少傾向にある。それを市内全部からいいですよという単純なそこからのスタートです。上大野も私水戸三中に勤務していたので水戸三中の学区の小学校なのです。ここも年々減少傾向でした。そのときにやはり上大野地区の環境、地域を生かそうということからスタートした。やっぱりそのときは、当時の校長の考えと市教委の考えでスタートしているということなのです。自分たちの学校を残そう。そこにその特色ある教育課程を編成した上に、地域がそこにまとまってきた。例えば大場小学校の体育もそうです。ここは本当に児童生徒数が減って、特色あるものをやろうとしたときに、体育で健康な体づくりをしようということからスタートしている。今現在も指定を受けたりして去年だったかな。多分発表をやっていたのではないかと思います。下大野小のICTもたまたまICTに長けている校長が、赴任して、そこで下大野もやって、今月かな、来月かな、発表会をやる予定で那珂市でもいったらどうだって私お話をしているのですけどもそういうところから始まっている。だから、これ最後に話そうと

思ったのですけれども、適正規模・適正配置っていうとどうしても最終的なものは統廃合ということは避けて通れないけれども、それ以前に前段階からきちんと先を見通したこういう場で話し合いをすることによって、小規模校の特色ある教育課程というのはいくらでもできると。例えば、木崎小には外の市内の13校にはないチーム木崎小という保護者地域を交えた一つの組織があるわけです。これが学校経営の中に入って子どもたちとのかかわりで色々な授業の中で取り組んでもらっている。これも私がこの教育長を拝命した後で、当時の校長と相談して何か木崎でできないか。つまり白鳥でやっているコミュニティではなくて、いわゆる那珂市版の学校運営協議会的なものができるか考えてくれと。額田小でも今年度から額田小のいわゆる那珂市版の学校運営協議会的なもの、つまりこれはもう完全なる学校支援です。そして先ほど榊原委員がおっしゃったように、地域が学校に色々な形で応援してくるとそういうことができる。だから、そういったことをきちんと計画的にやってくれば、5年先10年先に事務局のほうから説明があった最終的には改修とか改築は避けて通れないことなのだけれども、それと、中身を同時並行でいくっていうのは、どうなのかなっていう。やっぱり学校は学校として中身をしっかり考えていった上で校舎の改築とかというのは考えていかなくちゃならないのではないのかなっていう。実は先週も地域の人とちょっと会って話をしたときに、教育長、那珂市は統廃合をこの後考えているのかと言われたのですけれども、やっぱりそういうところはみんな関心を持っていると。そういう中でやっぱり教育委員会がやること、それから、地域に根差した学校ってどうあるべきなのかっていうのはやはり教育委員会と学校そして首長部局がしっかりと今後のこう考えていかなくちゃならないのかなっていうそんな思いはしています。ですからこういう協議の場っていうか、自由に意見交換できる場っていうのがこの総合教育会議に限らず、色々な形で今後やられていくと、那珂市としてはよりよいものができ上がってくるのかなっていう、そんな思いをしながら、今日の話聞かせていただきました。とりあえず現時点では以上です。

先崎市長： ありがとうございます。すみません、ちょっと困ったときの教育長で。いま教育長の話聞いてそれぞれの学校の中でやっぱり校長先生と教育委員会が連携をして、この学校をどうしていこうかっていうやっぱり真摯な話し合いがそこからアイデアが出てこの地域はこうしていこう。この学校はこうしようっていう。多分そういうことを一生懸命地域と学校があるいは保護者が一緒にやってくれば、例えば10年後に統廃合でなくなっても、気持ちが残ってくると思うのですよね。そういう努力の過程が、次の展開にまたつながるか

もしれない。そういうことを地域と学校とみんなが喧々譁々やって努力して、10年15年先にもうこれ以上無理だということで統廃合っていうことになったけども、統合された地域、なくなってしまった地域なんかもその努力した過程が次の展開に生きてくのかなとも思うのですね。何か知らないうちにこんなことになっちゃうのか。学校がなくなっちゃったらこんなふうになっちゃうのだっていうことを聞くのが1番つらいですよ。みんなが想像して何とかやろうと。なくなったら大変なのだからこうやって頑張ろうっていうことが地域の力、活力にもつながっていくのかなということだけはやっぱり那珂市内では繋いでいきたい。学校がなくなったらこんなふうになっちゃうのだっていうことではやっぱり残念な状況ですから、そういったことをみんな考えて学校中心に考えてみる。地域のありようを考えてみるっていうのは、大事なことなのかなと。色々な行事やっていますけども運動会なんかも最たるもので。地域と学校が一緒になってやっている。大きい学校は単独でもできますけどもね。額田の敬老会にこの前初めて参加しました。小学校の体育館使ってやっていたけどね。福祉施設にお願いをすると調理も全部やってくれるし、非常に揃っているから楽なのだっていう話を自治会の役員さんによく聞くのですけども。学校でやるのはそれなりの準備があって大変だと思うのですけど、何か額田は小学校の体育館でやっていたね。子どもたちも色々一生懸命披露し、日ごろの練習したものをお年寄りがそれを見て喜んでくれるっていう。原型のような形ですけども、でもやっぱり学校を中心にしてコミュニティをどう考えていくかっていうことも一つの事例なのだろうなと思って私は見させてもらいました。そういう意味でもっともっと学校と地域のかかわりが増えていってくれればいいなっていう気はしますね。

中澤委員： 今の市長さんの話の中で地域との連携、教育委員さんが話した地域との連携という中で学校の現状とその話を聞いて、本米崎小が廃校になったけれど、何でうちの本家から何で分家に行くのだよっていうふうな話も聞きました。でも、その中で私ね、現場にいたときにおいてなのですけど、ある学年の生徒が1人だったのです。話し合い学習といった場合に1人で話し合い学習ができないのでその子は多分、額田小にお世話になっていたと思うのです。あの現状を見た場合にはやっぱりこれ以上続けていいのかなっていうふうなところは思ったものです。やはりそういうふうな現状を地域のかたも知って、これではだめだから、一つの学校にしようっていうふうな感じであったのかなと思うのですけれど。でも、確かに学校がなくなれば、地域が少しポシャツとなるのだけれど、小規模特認校という道の中でいられるのかなっていうところもありますけれど、やは

りそれは地域の方々と喧々諤々とやって、最終的にしょうがないなっていうふうなのを地域のかたも思っていたらと思うので、やはりそのプロセスがなく統合ですよって言われれば、カチンと来て、何だよ、俺の方は統合できねえよってという感じはあるかなと思いますけど、そのプロセスを十分やっていけば、地域のかたが納得していただければ、そういう形になろうかなと思いました。

住谷委員： 今の中澤先生との関連ですけれども私最初に教育委員やらせていただいたときに、本米崎小の入学式に行ったのですね。そのとき地元の有力者のかたがグルっと周りを取り囲みまして、何だ無くすのかと言われたのです。そう言われた過程は分かりませんが、それを報告したら教育委員会の部長さん、課長さん、G長さんとかが非常に丁寧な説明を何回も何回もなさって、それ以後は余り詰め寄られることはなかったのですけど、やっぱり丁寧な説明で出来ることは全てやるというぐらい丁寧にやらないと後でしこりを残すんじゃないかと思います。それはそれで無くなったけれども、実際に私もあそこ通りますとちょっと寂しいですね。本当にあの辺が静かで人の姿が全く見えないという、子どもたちの姿が見えないっていうのは、地元にとっては耐えがたいことかなっていう。ですから、無くなることは本当大変だかっていうことで、本家本元がなくなって何で横堀行くのだっていう話も言われましたので、そういうこともあるのかなっていうことで一応経験をお話し申し上げました。

榊原委員： 幸いに本米崎地区も私、仕事柄色々なかたとお話しするのですけど、最終的にやっぱり子どもの数が究極に減少しちゃって、運動会やります、なにやりますと成立しないということで地域が下りちゃったっていう話はもちろん聞いております。ただあそこは那珂市内ではちょっと特殊だったところで、神崎地区に二つあったのですね。地区に1校じゃなくて。そういうところも加味した上での話なのでしょうけれども、いま現状小学校がなくなっちゃって確かに本米崎は実に寂しいような風潮が見えるのですけど、実は本米崎地区っていうのは独特な文化を持っていて、いま本米崎地区だけ単体で、横堀小学校区じゃなくて旧本米崎地区で色々な若い人が集まって、イベントを開いたりとか色々なことやったりとかされている。もうすごく熱量を感じます。1番最初の話ですけど、ご理解した上での話での廃校っていうところにつながって、その中で本米崎地区っていうのをアピールしているところがすごく本米崎にある。これは僕も実に頭の下がる思いですね。額田も頑張っているのですけどね。

小笠原委員： 皆様のお話を伺ってなのですけども、相当様々な政策や指針の見直しっていうことに関して、行政の中でもすごく今まで本当にこれが良かったのか、無駄じゃなかったのかっていうのを見直して、それで実態にあったやり方に変えましょうっていう、特に委員会

の会議やその内容についてもそうなのですが。そういうことがすごく活発に行われているなって印象があります。その一つが、保幼小中連携っていうのを今やっています、それはなかなか他の市町村では聞いたことがないってということと、それから支援を必要とするお子さんの就学前の情報を学校にきちんと引き継ぎましょうっていう。そのために、両方にかかわる職員さんをおいて連携を図りましょうってということも、これも他の市町村ではほとんど聞くことのない。ないわけではないですけど、余り聞かない。他市町村にすごく誇れる部分だと思います。そういう良さをきちんと市民の皆様にも考えていただくということと、それからどうやったら人が那珂市に来てくれるか。これから生まれるだけじゃなくて来てもらわなきゃいけないと考えたときに、何の質が高いのかっていうので当然学力ってということもあるのですが、学力を支えるものは、市長さんもおっしゃった人の関係であったり情操であったり、それからそういうのを全て含めて教養と名をつけるのであれば、高い教養を身に付けるために、最終的にはいわゆる上級学校に行くみたいなことが可能であると。それを支えるのは、本当に点数だけではなくて、少ない人数で丁寧にかかわって、そして子どもたちの意欲を引き出していくことが学力にも当然つながっていくし、学力って考えた場合には、こういうこと知りたいと思うのも一つだけ点数を取りたいと思って勉強するという子も、その高い学力を持った子も中にはいて、そういう子どもたちのこうした思いをきめ細やかに取り上げていけるような学校づくりっていうのは、これは大規模校であっても小規模校であってもなんら変わりのないところであるので、先生方の意識というか、あとは我々市民が子どもたちも大人も教養を高めていこうと。特に年配のかたはものすごく知的好奇心が強くて歴史とかいうと人が集まって勉強しているし、その勢いを是非子どもたちにも守ってもらいたいなと思うと考えると、どうやったら丁寧な教育ができるかっていうことに本当に尽きると思って、それは学校から始まることじゃないって思うのは思っておりますので、今後とも、慣例を崩す必要性、あと見直す重要性っていうのを是非色々なところでやっていきたいなと思っていますけども。

先崎市長： 保幼小中連携まで素晴らしい取り組みだということで、大縄教育長さんからも、那珂市の小中一貫、これはもう、やっぱり一生懸命やっている、誇っていいことだというお話も聞きました。中一ギャップももしかしたら幼稚園、保育園から小学校に入るときギャップの解消にもつながる色々な効果があるのだと思うのですね。先ほど事務局の説明の中では、この適正規模・適正配置が小中一貫と微妙にまた絡んでくるっていう時期も来るかもしれないと。そのことに

ついて見直さなくちゃいけないっていう話もありました。たぶん現場では色々機能しているのだろうなっていうふうを感じるのですけども。どうですかね、委員さんの中で小中連携や小中一貫あるいは保幼小中連携、何かについてこう感じるころがあれば、この機会ですので、もし感想なんかをいただければありがたいと思うのですが。

住谷委員： 小中連携で中一ギャップの解消ということの一つの旗印にして始めたのですけれども、確かに現場に行くと中学生と小学生が交流するっていうのは、そういう意味で非常に情緒的に安定性をもたらすっていう中学生もそうだし、小学生もそうだし。そして幼稚園と小学校の場合もやはり小学生にかなり自覚を高める。そして自分のことは自分でやった上で面倒みようという認識もかなり喚起しているように思います。ですからそれが幼稚園、小学校、中学校と行くと、かなり那珂市はそれだけでなく、周りから見ると非常に安定した市なのですね。子どもたちの安定度が非常に高いのです。そういう意味でいうと、この取組みというのは是非とも続けていって、そして子どもたちの情緒の安定。それは、いじめをなくすということもかなりの度合いで繋がっていると思いますので、それを推進してきた方がいいというふうに思います。できればそこにまた高校生を巻き込んで、中学校を出て様々な学校へ行っている高校生もそこにかかわることによって。高校生会っていうのもありますけれども、ちょっと低調のようですけどね。そういうことも含めることによって、市としての一体感、子どもたちの一体感。そしてそこに大人と年取った方々の一体感っていうのを高めていければと。以上です。

先崎市長： はい、ありがとうございます。そうですね。小規模校でよくクラス替えができなくなると、そろそろ考えなくちゃいけないのではないかっていう。そのクラス替えに変われないと思いますけども、やっぱり小学生が中学生と交流することによって人と触れ合うことなんかの経験もすることができる。ですから、やっぱり小中一貫は素晴らしい取組みだと思うし、さらに高校生まで入れたらいいじゃないかという話もありましたけども。お兄ちゃんお姉ちゃんたちともあるいは弟、妹たちとも触れ合うということが大事なのだなっていうことは、何となく私も想像できますね。

中澤委員： 例えば保幼小。実際その現場にいた場合において、今までは小学校と幼稚園、あるいは保育園はあまり交流なかったと思うのです。それで、例えば幼稚園なんかの4歳、5歳児っていった場合において、お店屋さんごっこっていうごっこ遊びをやるのです。小学校1年生、2年生の場合においてもやはりお店屋さんごっこ、同じことをやるのです。そこに全然連携がなかった場合においては、小学校

の先生は何も言っていないから同じようにまたゼロからのスタートで指導をやっていく。幼稚園でこんなことやっているのですよっていうふうなことが分かれば、やはり小学1年生の段階において、それにプラスアルファの指導ができると思うのです。今までそういうふうなのがなかったものでブスブスンと切れていたのですが、今はやはり保幼小っていうところで幼稚園、保育園との小学校との連携ができてきていることによって、その指導内容的なものも小学校の先生がわかってそれプラスアルファっていうことをやっているのかなって思います。また当然こう上がっていく場合において、幼稚園あるいは保育園での状況が分かっていた場合、小学校が分かった場合においては、例えばクラス編制をやる場合においても十分そういうふうな情報が上がることによって、子どもたちへの指導っていうふうなのがまた手厚くできるかなと。だから、保幼小連携というふうなところで、この那珂市が取り組んでいるっていうことは非常に大切なこと、重要なことかなっていうふうなことを思っております。

先崎市長： どうですか、他にございますか。はい、限られた時間の中でやってきました。再度大縄教育長はどうですかね。これまでの議論なんかを踏まえて少しまとめた話になるかもしれませんが、お願いします。

大縄教育長： はい、ありがとうございます。私もずっと先ほど何点かお話をさせていただいたのですが、今日のこの適正規模・適正配置についての私の思いについては最後話をさせていただきますけれども、いま色々なキーワードが出てきて、私なりにここに記録をしたのですが、やはり本市の特色である小中一貫教育あわせて保幼小中連携。これについては今後ともしっかりと進めていかなきゃならない。ただ、これは全てにおいてそうですけれども、随時見直し、検討、これはやっていかななくてはならないことだなというふうに思っています。これだけ時代が進んでいる、あるいは子どもたちの姿、あるいは保護者の思い、考えが違ってきている時代の中で、一つのことにとらわれていたのでは駄目だなと。やはり柔軟な発想のもとで柔軟な那珂市の教育というその大きな特色を続けていくことが教育委員会に課せられた使命じゃないのかなっていうことを改めて感じました。あわせて、やはり、学校は中身的なものは校長の裁量で行うものであって、教育委員会ができるころはその連絡調整やその指導助言であるとそう考えていったときには、これまでもそうですけれども、特に校長会を中心とした組織と教育委員会との連携というのは、今後さらに強化をしていかなきゃならない。今でも太いパイプがありますけれども、さらに太いパイプにしておく必要があるのだろうなという思いが強くなりました。

あわせて、小規模校もそうですけれども、その規模にかかわらず、

校長が自分の学校の学校経営、学校運営をどう進めていくのかについてということについては、市の思いを伝えた上で、さらに校長については、グランドデザインをもとにした学校経営。それを進めてもらうことが、14校という市の中では適正な規模なのかなと。それをさらに強固なものにするという一つ大きな意味合いを持つのかなという思いを強くしました。そういうことを踏まえて、今日この総合教育会議の中で、適正規模・適正配置について、委員の皆様から、そしてまた市長からもご意見、思いをいただいたわけですが、やはり、将来的にどうするかは別として、今後やはりこの適正規模・適正配置の検討については、我々教育委員会をはじめとして、考えていかなくちゃならないことだろうとこれは今日がこういういいスタートになったのかなという気がしています。

あわせて、今日の会議の中で幾つかご意見等いただきましたけれども、教育委員会だけで考えるのではなくて、やっぱりそれに付随する関係課が一緒になって総合的にやはり考えていかないと、この統廃合、最終的にどうなるかわかりませんが極力少なくなってしまうらもうそれはせざるを得ない。そういうことにならないためにも途中の経緯であるとか丁寧な説明であるとか那珂市の丁寧な教育をやっていく上でも、そういう市教委だけでなく、関係部署と連携をしながら、きちんと政策提言として総合政策として、市として最終的には考えていかなくちゃならないのかなというふうに思いました。教育委員会としても今日の意見をいただいた上で、最終的にはソフト面、ハード面、関係部署と連携をとりながら進めていきたい。そんなふうに思っておりますので、今後この総合教育だけじゃなくて、あらゆる形で意見交換の場があり、定例の教育委員会の中あるいは協議会の中でもこういったものについての意見交換をしながらあるいは市長にそういったことを提言しながら進めていけばいいのかなというふうに思いました。

いずれにせよ、やはり那珂市の宝である子どもたちのために我々ができること、子どもたちのために何がいいのかを考えていくこと。そして、市の、あるいは地域の発展ということを考えてときにどうすべきかっていうことも踏まえた上で、特に適正規模・適正配置については、今後さらに、検討をしていく必要があるのかなというふうに思いました。今日のこの話し合いがさらに今後の進展に資するところがあればいいかなというふうに思います。以上です。

先崎市長： ありがとうございます。教育長にまとめていただいたところで、そろそろ予定の時間が近づいてきたようです。今回、私の方から、那珂市における小中学校の適正規模・適正配置について、ということと協議をお願いしたところですが、皆様から、多岐にわたって様々なご意見をいただき、大変有意義な会議になったものと思いま

す。少子化という社会的背景から、児童生徒数の減少は、今後も継続して続いていくことは間違いありません。また、少子・高齢化は、本市の財政基盤の維持にも、多大な影響を及ぼす要素でもあります。今後、那珂市の教育をどうしていくか、その教育を実施する場である「学校」をどうしていくか、大変大きな課題ではありますが、本日、皆様と議論したことで、那珂市の教育の将来像を見据えたときには、新たな「適正規模・適正配置の基本的な方針」を策定しなければいけない時期に来ていると、私自身、理解が深まり、また、皆様とも、その認識は共有できたのではないかと思います。今後、学校教育課が担当になると思いますが、今回の議論をもとに、さっそく方針策定の準備に着手してもらいたいと思います。那珂ビジョンでは、目標年度を令和5年度と設定しており、課題の大きさを考えると、タイトなスケジュールになるとは思いますが、確実に進めていただくようお願いいたします。また、せっかく、議論の発端を、この総合教育会議においたわけですから、来年度以降も、進捗状況の報告をはじめ、その都度、必要な議論はこの会議を活用して、ぜひ、教育委員会と市との連携で進めていきたいと思います。委員の皆様、いかがでしょうか、そういったことで、本日の会議の結論としたいと思いますが、よろしいでしょうか。

教育委員：（承認）

先崎市長：ありがとうございます。では、非常に重要な重い課題でしたが皆様のご協力で、本日の協議事項は終了といたします。進行へのご協力、誠にありがとうございました。それでは進行を事務局にお戻しします。

渡邊総務課長：長時間にわたり様々な意見をいただきありがとうございました。協議事項は以上で終了となります。今後のスケジュールなのですが、来年度、総合教育会議が開催することになりますので、日程につきましてまた改めて調整をさせていただきたいと思います。その他委員の皆様から特になければ、以上をもちまして令和元年度第1回那珂市総合教育会議を閉会といたします。長い時間ありがとうございました。